



平成30年3月5日
益田教育事務所

問い直すことから・・・

益田教育事務所 岡本 昌浩

「知っていますか？子どもたちが学んでいる同和問題の歴史」というリーフレットをご存知でしょうか。これは、島根県教育委員会人権同和教育課が平成24年3月に発行した保護者向けの小冊子です。この冊子の表紙には、「小・中学校社会科教科書の同和問題に関する記述が見直されてきています。みなさんも子どもたちと一緒に学んでみませんか。」とあります。この冊子を読まれた保護者は、自らの学びを「問い直した」ことでしょうか。このように、この冊子のよさはわかりやすさだけでなく、問い直すことの大切さに気づかせてくれたことにあります。今でも私の心の中に残っている1冊です。

私たちは日々の忙しさの中で、様々な情報に対してどうしても受身的になってしまいがちです。そんなとき、一度立ちどまって「問い直す」ことで新たな学びが生まれることがあります。たとえば、「主体的・対話的で深い学び」。小学校学習指導要領にはこうあります。

・・・児童が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること。

ほとんどの教員にとって、このような文言はどこかで読んだ気もするし、こうした授業づくりをめざして日々奮闘してきたはずです。私自身も、できたかどうか問わなければそれなりに努力してきました。しかし、だからといって、これからも今までどおりでよいということにはなりません。たとえば、ここでいう「見方・考え方」とはどんなものなのか、それは能力なのか、視点なのか、「働かせる」とはどういうことか、いくらでも疑問が生まれてきます。実は「見方・考え方」は深い学びの鍵になるものです。このように、自分の中で生まれた疑問を問い直すことで、深い学びにつながっていくように思います。

益田教育事務所では、こうした「問い直し」を学校教育スタッフ、社会教育スタッフの総力をあげてしてきました。テーマは「社会に開かれた教育課程」です。今までも学校と地域とが一緒になって教育活動をしてきたのに、「なぜ今、社会に開くなのか」、「開くとはどういうことか」、「そもそも社会とは何か」など、自分たちで「問い」を立て、「主体的・対話的な学び」を通して、「深い学び」をめざして議論してきたのです。とくに、社会に開かれた教育課程の理念である「よりよい学校教育を通してよりよい社会を創る」ことの意味について、学校教育と社会教育のスタッフが連携して深く掘り下げることができたことは大きな収穫でした。

このたび、今までの議論の成果を「社会に開かれた教育課程【Q&A】」という8ページの小冊子にまとめました。先日の島根県学力調査結果説明会の折りに各校に配布しましたので、ぜひご覧ください（「EIOS-しまね」にもアップしています）。次期学習指導要領についての研修の際には、この冊子もあわせて活用していただけるとうれしく思います。

益田市における幼児教育と学校教育の接続

益田市教育委員会 派遣指導主事 小石伸江

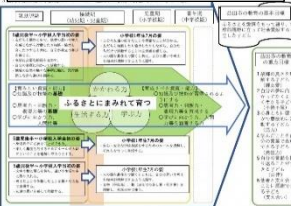



4月、学校は新入生を迎えるために始動します。いや、実際は前年度の夏頃から準備が始まっているとも言えるかもしれません。義務教育スタートの場である小学校は、1年生が安心して学校に通うことができるように、保育園や幼稚園と情報共有したり、保護者の方からの問い合わせに答えたりときめ細やかな連携をしています。

このような中、次期小学校学習指導要領の総則・各教科の指導計画の作成と内容の取扱いに「特に、小学校入学当初においては、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること」、いわゆるスタートカリキュラムの実施について明記されました。

今年度、益田市教育委員会学校教育課と子育て支援課が、益田市保育研究会と連携して行った幼児教育から学校教育への接続に関する取組を2つ紹介します。

1. 「益田市版接続カリキュラム」の作成

A 3版4枚の構成です。

<p>1枚目： 益田市の教育目標</p> 	<p>2枚目： 就学前の育ち</p> 	<p>3枚目： 接続カリキュラム</p> 	<p>4枚目：接続カリキュラム (主な支援・各機関のカリキュラム)</p> 
---	---	--	--

このカリキュラムは、小学校と就学前機関との連絡会でそれぞれの職員が子どもの姿や学習活動を共通理解したり、就学時健康診断時の説明で保護者が小学校生活を理解したりするために活用できると思います。

益田市教育委員会サイボウズの「ファイル管理→フォルダ→保幼小連携」に掲載しています。益田市小・中学校教職員以外の方は、学校教育課にお問い合わせください。

2. 保育園・幼稚園・認定こども園・小学校の職員が一堂に会しての研修会

2月8日、益田市役所大会議室に55名の参加者を迎え（保育園・幼稚園等から40名、小学校から15名）、千葉大学教育学部：松寄洋子教授に講義をしていただきました。

子どもが、接続期の段差の越え方を学ぶことができるようにしましょう。

- ・自分で判断して行動できる言葉かけ
- ・見通しをもつことができる言葉かけ

職員同士は、「自分の理解と相手の理解は違う」ということを意識してコミュニケーションをとりましょう。

豊かな教育環境を構成しましょう。

- ・魅力的な素材とその提供（教材研究）
- ・試行錯誤が可能な時間・状況の工夫（カリキュラム）
- ・「熱中」「没頭」「遊びこみ」できる雰囲気づくり（安心感）

「学んで〇〇すること」「〇〇」にどんな言葉を入れるのかを意識して子どもを育てましょう。

講義後、塩満神田保育園長と学校教育課の中尾指導主事が前述の益田市版接続カリキュラムについて説明しました。これからも、幼児教育・学校教育に携わっている者が、接続期の子どもの姿を同じ指標で捉え、子どもの育ちを入学時から保障できるような保幼小連携を推進していきましょう。

「出会いには必然」 ～出会いを見つめ直して～

吉賀町教育委員会 派遣社会教育主事 水上 真悟

「出会いには必然」これは私が以前勤めていた小学校の校長先生から聞いた言葉です。続いて「偶然に感じる出会いだけでも、その時、その場所で出会うべくして出会い、その出会いには必ず意味がある」と話されました。

派遣社会教育主事として勤め始め、もうすぐ1年が経とうとしています。その中でたくさんの新しい出会いがありました。これらの出会いも全て「必然」であったのですが、目前のことに心を奪われ、「出会いの意味」に気付いていないことも多くありました。しかし、ある事業をきっかけに、出会いについて見直すことができました。

吉賀町教育委員会には、年間4回実施する親子体験事業「サクラマステー」があります。先日、その第2弾として「親子 de 逃走中～吉賀町バージョン～」を開催しました。六日市学園の学園生と町内のサッカークラブ「紫逅倶楽部」にハンター役をお願いし、ボランティアスタッフとして関わっていただきました。このように地域の団体に関わりを求めたことはこれまではなく、今後の活動の広がりや地域の活性化へのつながりを期待していました。

当日は、町内各地区から36名もの多くの親子の参加があり、「普段接することのない親子と関わることができてよかった。」「久しぶりに親子で一緒になって全力で体を動かした。」などの感想をいただきました。私は本事業のねらいとしていた「親子のコミュニケーション」「参加者同士のつながりづくり」等に迫ることができたように感じていました。事業を終えた時の私は、無事に事業を終えたことに安心し、大いに盛り上がりを見せたことに満足さえしていました。

ふと、企画・運営にあたった私たちと参加者とボランティアスタッフとの「出会いの意味」とは何だったのだろうか振り返ってみました。その時、ボランティアスタッフとして依頼した方々に対して、「手伝いをしてもらう」という見方しかできていなかったということに気が付きました。

企画・運営にあたった私たちとボランティアスタッフ、また参加者とボランティアスタッフ、それぞれの「出会いの意味」を見出す事ができていれば、「出会いに価値付け」をする仕掛けをつくり出すことができていたはずですが、しかし私は、企画の段階から参加者のことだけを考えていたため、参加者同士の出会いしか見えていなかったのです。多くの人が関わっているこの事業を様々な視点で見る必要でした。そうすることで、関わってもらった全ての人たちの学びの場になり、今後のさらなる広がりやの機会になっていたと思います。出会いに「意味を見出す」「価値を付ける」ことの必要性を感じた瞬間でした。

私たち社会教育主事は、日常から多くの出会いがあります。今後も一つひとつの「必然の出会い」を大切に、「出会いの意味を見出す」「出会いに価値を付ける」ことに併せ、人づくりの伴走者として「意図した出会いづくり」も意識していたいと思っています。



アクティブな校内研修を

益田教育事務所 村上 剛

今年度もたくさんの学校の校内研修に参加させていただきました。それぞれが工夫を凝らしながら、教職員が“アクティブ”になる研修会が増えていることを嬉しく思います。

たくさんの実践の中から、2つの中学校の事例を紹介します。来年度の研修の方法を考える時のヒントになればと思います。

事例1 益田市立高津中学校(益田市教育委員会指定:学び合い)

<ポイント①>

学び合いのグループに担当教員を配置。グループ内の会話や活動の様子を観察し記録する。

さらに、教師用タブレットのカメラ機能を使って、動画を取っておく。



<ポイント②>

研究協議の時に、担当したグループごとにタブレットで録画した動画を見返しながら、授業者と生徒(グループ)とのかかわり方や、生徒同士のかかわり方などについて話し合い、よかったところや改善すべき点をあげていく。



<ポイント③>

全体協議では、あらかじめ示されていた本時の視点を基に、タブレットを電子黒板(モニター)につないで、グループで話し合われた場面を見ながら説明をして、全体で共有する。

☆よい面

- ・グループ活動時に、授業者が見取れない部分を確認することができ、授業者が生徒の「学びを深める様子」を知ることができる。
- ・全職員が関わることで、「教科の壁」を越えて能動的に協議に参加できる。また、担当教科以外の生徒の様子を知ることができ、生徒理解につながる。

★難しい面

- ・全職員が授業に関わるように時間割の調整をすることや、映像を見るため協議の時間を確保すること。

事例2 吉賀町立六日市中学校

六日市中学校では、研究主任を中心に、全教職員で次期学習指導要領についての研修を実施しました。指導主事の講義の後、グループに分かれて話し合いを行いました。

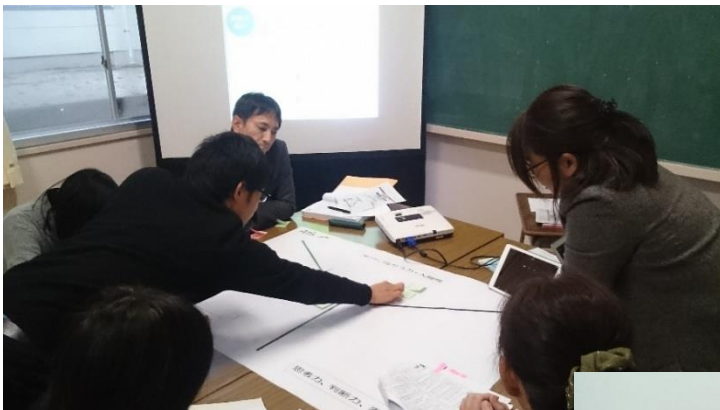
<ポイント①>

「次世代型教育推進センター」のHPから、学校の実態に沿った研修プランを選び、修正を加えながら実施。

※今回のねらいは、一人一人の実践がどんな資質・能力を育むためのものかを分析し、これからの生徒に付けさせたい方を全教職員で考えることであった。

<ポイント②>

校長先生のリーダーシップのもと、教員だけでなく、養護教諭や事務職員も一緒に全教職員で協議。



☆よい面

- ・自分の実践がどのような資質・能力を身に付けさせるためのものなのか、協議することで再発見できる。
- ・他の教科（先生）の取組を知ることができ、教科どうしのつながりを意識することができる。

★難しい面

- ・思ったより時間がかかってしまうため、放課後の時間だけではまともきれない可能性がある。



限られた時間の中で、実りある研修をするためにも、全職員がアクティブになる工夫は必要だと思います。今後も「主体的・対話的で深い」研修になるようにしていきましょう。

